

グローバル人財・グローバル人財育成に向けた教養教育Ⅱ  
— 平和学メジャー海外フィールド・ワークの授業開発・実践・課題 —

篠原 收

A Study of Liberal Education for Global and Glocal  
(Local related with Global) Human Resource II  
— Educational Program of Field Work on Oversea in Peace Study Major —

SHINOHARA Osamu

## グローバル人財・グローバル人財育成に向けた教養教育Ⅱ — 平和学メジャー海外フィールド・ワークの授業開発・実践・課題 —

篠原 収

### A Study of Liberal Education for Global and Glocal (Local related with Global) Human Resource Ⅱ — Educational Program of Field Work on Oversea in Peace Study Major —

SHINOHARA Osamu

#### はじめに

広島女学院大学国際教養学部国際教養学科では、開設初年度である2012年度から、グローバル感覚を体得するための海外フィールド・ワークを数多く実施してきている<sup>1)</sup>。国際教養学科平和学メジャーにおいても、2014年度に海外フィールド・ワークを実施するために、前年度(2013年9月)に研修地であるベトナム社会主義共和国(以下、ベトナムという)での事前調査を実施して、研修内容を検討し、学修内容を工夫することにした。教育効果を高めるための授業展開を検討し、2014年度春学期における事前学習に反映させた。2014年9月に海外フィールド・ワークを実施し、現地研修後の秋学期には、参加学生に『ベトナム平和学修報告書』(広島女学院大学国際教養学科平和学メジャー)を作成させ、学内外での三回の報告会において、パワーポイントを活用した報告発表をさせる事後学習を通して、学修成果をさらに深めることができた。

本稿は、国際教養学科平和学メジャーが実施した海外フィールド・ワークの授業開発・実践における教育目的を明確なものとし、今回の教育成果を検証するとともに、次回に向けての課題について検討するものである。

#### I 広島女学院大学国際教養学部国際教養学科平和学メジャーにおける グローバル人財・グローバル人財育成の方向性

広島女学院大学国際教養学部国際教養学科平和学メジャーにおけるグローバル人財・グローバル人財育成の方向性については、拙著(2013)「グローバル人財・グローバル人財育成に向けた教養教育」において論じている<sup>2)</sup>。広島女学院大学では、グローバル・シチズン(地球市民)としての地球的規模での社会貢献をめざすグローバル人財の育成をめざすとともに、地球的な視野で思考し、地域社会に貢献するグローバル人財の育成もめざしている。キリスト教主義教育を通して、予測困難な時代を生き抜く力を育むだけでなく、「隣人愛」(悩める隣人、貧困にあえぐ隣人への献身)をもって、共生社会の実現に向けた知識とスキルを身に付けさせ、地域社会におけるグローバリゼーションである「内なる国際化」にも積極的に活躍できるグローバル人財育成をめざしている。世界の「貧困問題」に目を向けることができるだけでなく、日本国内の「格差や貧困」に対しても解決に向けて努力できる人財こそが、「隣人愛」を体現しているのである。

広島女学院大学におけるグローバル人財育成、グローバル人財育成にあたって、求められる要素として、語学力とともにグローバル感覚の獲得が必要である。グローバリゼーションに順応できる人財とは、グローバル

社会、日本社会、地域社会における「同時代感覚」の獲得が大切であり、「公正社会」、「共生社会」の実現に向けた感性と知識・技能の獲得をめざす人財である。隣人の「痛苦」に想いを馳せることができる人財であるとともに、ダイバーシティ（多様性）を受容・尊重できる人財の育成が求められる。こうしたグローバル・センシティブな学生を育成することをめざしているのである。

平和学メジャーでは、「人はひとりでは生きていけないからこそ、お互いを理解し、お互いを尊敬しながら共に生きることができる社会、共生社会の実現をめざそうとする。私たちが暮らす社会を一人ひとりが自分らしく生きることができる社会へと、自ら主体となって変革する力となることができれば、幸いである。平和な社会とは、戦争や暴力がない状態をさすだけでなく、飢えや貧困、社会的抑圧や差別などの『構造的暴力』が克服された社会」であり、平和を創り出す人財の育成をめざしている。「日本社会に生き、国際社会に生きるものとして、今日の日本社会や国際社会の現状と課題についてどれだけのことを知らされているだろうか。あるいは、知ろうとしてきただろうか」と、受講生に問いかけている<sup>3)</sup>。

平和学メジャーのカリキュラム全体を通して、グローバル感覚、ダイバーシティ・センシティブな態度を育んできているが、とりわけ海外フィールド・ワークを通して体得できるようにしていきたいと考えている。

## Ⅱ 平和学メジャーにおける海外フィールド・ワーク授業開発・実践・課題

平和学メジャーにおけるグローバル人財・グローバル人財育成の方向性と合致した、個々の授業展開が求められている。グローバル感覚、ダイバーシティ・センシティブな態度を育む授業開発・実践が必要とされ、評価を通して不断の授業改善もまた求められている。

学生からみて受動的な教育の場では、社会的ニーズに対応した人財は育成できない。教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要であり、ピアサポート（相互支援）教育も取入れた授業展開をめざしたいと考えた。

また、個々の学生の認知的、倫理的、社会的能力を引き出し、それを鍛えるディスカッションやディベートといった双方向の講義、演習、実習などを中心とした授業への転換が必要であると考えた。PBL教育としては、Project Based Learning（研究プロセスの実践・体験・経験）の導入を図った。主体的な学修の体験を重ねてこそ、生涯学び続ける力を修得できるのである。

グローバル感覚、ダイバーシティ・センシティブな態度を育む授業開発をめざす、海外フィールド・ワークでの学修内容について、実施前年度の現地調査（9月実施）を前に、具体的な研修先、研修内容を検討することから始めた。「平和学修」として位置づけ、1975年4月30日のベトナム戦争終結から、40年近くになるとうしているにもかかわらず、戦争被害が続いていることを参加学生に認識してもらうために、「戦争証跡博物館」を見学するだけでなく、米軍の枯葉剤投下によるダイオキシン被害者の方々から証言を聞くことや彼らとの交流を企画したいと考えた。現地での事前調査の際に、現在もなお、ダイオキシンの影響を受けた出生児の存在を示す資料<sup>4)</sup>を入手することができた。

同じ米軍の原爆投下による戦争被害から70年近くたっても、今なお、原爆被害に痛苦する被爆者の方々をさらに身近に感じてもらうことができるのではないかと考えた。枯葉剤投下によるダイオキシン被害者はベトナム人だけではなく、米軍人・韓国軍人やその家族にも被害者がいるのである。原爆被爆者もまた、日本人だけではなく、植民地下の朝鮮半島から広島・長崎に来て、「日本人」として暮らしていた韓国・朝鮮人、強制連行されてきた中国人などの人びとがおられた。「グローバル」な視座で戦争被害を理解してほしいと願ったのである。

ベトナムに対する興味、関心を深め、文化や歴史について学ぶことは、グローバル感覚、ダイバーシティ・センシティブな態度を育むうえで大切である。とりわけ、本学の平和学メジャーの特長は、平和学領域とともに女性学領域を深く学べるようにしており、ベトナム女性について理解を深めてもらいたいと考えた。そのた

めに、「女性博物館」見学を組み込んだ。事前の現地調査では、同施設の運営母体である「ベトナム女性連合会」の国際部を訪問したが、責任者不在とのことで、資料収集にとどまった。次回の海外フィールド・ワークでは、「女性博物館」の案内やブリーフィングを、国際部を通して事前をお願いすることを検討したい。ベトナム女性の現状と課題については、今回は、「UN Women」ベトナム事務所にブリーフィングをお願いしていた。事前の現地調査で訪問した際に、着任したばかりの事務所長が日本人女性であり<sup>5)</sup>、日本語でのブリーフィングを快諾していただいた。

「UN Women」のベトナム事務所長をはじめとして、数多くの日本人女性がベトナム現地で活躍しており、参加学生にとって、彼らとの懇談を通して、現況や心境を聞くとともに、グローバルに活躍することの意義を理解することが、グローバル感覚、ダイバーシティ・センシティブな態度を育むうえで大切であると考えた。「UN Women」ベトナム事務所でインターンシップ中の方や、新卒で日系旅行代理店に勤務している方との懇談の場を設けた。

また、大学院での同窓生であったベトナム人夫妻とも、学生との懇談の場を設けることができた。ベトナム人の家や職場を訪問することで、ベトナム人の生活を垣間見ることもできたのではないだろうか。学生たちからの多岐にわたる質問に対して、ふたりから時間をかけて、ひとつひとつ丁寧に回答していただいた。書籍やネット情報では得られない「生の声」を聴くことができたのではないかと思う。懇談するいずれの場合も、事前にインタビュー調査票を学生たちが作成し、メールで送付しておいたので、短時間にもかかわらず、調査票以外の質問にも対応していただいた。

日系企業のグローバルな海外展開の実態とともに、家族帯同で赴任する企業人の子弟を支える教育機関の実態についても、ベトナムにおいて理解することができると考え、事前調査に際して、前述した友人の伝手で紹介された「ベトナム日本商工会」を通して、「Ogino Vietnam Corporation（以下、オギノ・ベトナムという）」を紹介していただき、直接訪問、打ち合わせをすることができた。今回の海外フィールド・ワークにご協力いただけることになり、さらに、責任者の方から個人的に「ハノイ日本人学校」もご紹介いただくことができた。「ハノイ日本人学校」の責任者の方には、今回の海外フィールド・ワークの目的・ねらいなどについて、何回かの往復メールを通して説明し、訪問の了解を得ることができた。「オギノ・ベトナム」責任者の方の蔭ながらの力添えがあればこそと、感謝している。

「オギノ・ベトナム」は、広島県に本社を置く自動車部品関連企業「荻野工業株式会社」の海外工場のひとつである。まさに、広島を拠点にしたグローバル人財が求められているのであり、求められている人財像を知る手がかりとなる。また、海外に事業展開する日系企業の工場や事務所に赴任した帯同家族として海外に暮らす可能性を認識するとともに、将来における自らの子どもに対する「教育」のあり方についても実感することができると考えた。

海外フィールド・ワーク先である現地ベトナムでは、参加学生がベトナム語を解せないため、日本語による通訳、現地案内を旅行業者に委託した。また、交流対象となるタンロン大学での学生も、日本語学科の学生であり、日本語によるベトナム研修となった。タンロン大学は、社会主義国であるベトナムには珍しい私立大学のひとつである。学生数からすると、中規模校ではあるが、日本学科の学生は年々増加し、2014年度の在籍者数は800人以上とのことであった。

タンロン大学では、「日本クラブ」の学生たちや日本語学科の学生が交流相手であった。本学の参加学生は、日本の文化や若者を紹介するスライド、原爆被害の実相を伝える「ヒロシマ」を紹介するスライド、ダイオキシンの毒性とその被害に関するスライドを準備して臨んだ。ベトナム戦争における米軍による枯葉剤投下による被害の実相について、タンロン大学生も理解が充分ではないと、事前調査の際に同大学教員から告げられていたからである。学内施設見学をし、交流会では民族衣装の「アオザイ」着用のファッション・ショーや音楽プログラムも用意されており、伝統的な遊戯に日越学生が一緒に興じたりした後に、学食で昼食を共にした。当日の晩は、タンロン大学生有志により、学生同士での親睦会も催された。

タンロン大学を訪問した同日午後からは、ダイオキシン被害者の養護施設である「平和村」をタンロン大学

生とともに訪問した。責任者から施設の概要についてブリーフィングを受け、グループごとに施設見学後、ボランティア・ワークに取り組んだ。子どもたちの障がいの程度により、音楽の時間のように、事前に準備したプログラムをこなすことが困難なグループも続出した。「ちぎり絵」を準備したグループは、図画・工作の時間に当たっていた子どもたちと協力して、時間内に完成にこぎつけた。作品を教室に展示させてもらうことも、施設の責任者に了解いただけた。

今回の海外フィールド・ワークでは、現地研修期間中のみならず、事前学習、事後学習においても能動的学修（アクティブ・ラーニング）を展開した。さらに、事前学習では、グループでの研究テーマを設定させて、タンロン大学でのプレゼンテーション準備において、PBL教育を導入、展開した。個人別テーマについても同様であり、事前学習と現地でのヒアリングを通して知見を深めることができた。また、「平和村」でのボランティア・ワークの準備でも同様にPBL教育を導入、展開した。事後学習では、事前に割り当てられた担当箇所の報告書執筆だけでなく、編集作業においてピアサポート教育を導入、展開した。また、学内での海外フィールド・ワーク報告会、「ピース・フォーラム in 修大（広島修道大学）」での報告、広島ベトナム協会主催の「テト（旧正月）を祝う会」での報告に際して、参加学生が分担、協力しあい、自分たちで準備を進めた。

なお、学科として保護者向けに説明会を実施するとともに、直前には日程表とともに研修概要（宿泊先、緊急連絡方法）などを記載した『ベトナム研修』実施に関するご連絡とお知らせを配布した。海外フィールド・ワーク先のベトナムが自然災害等で、一時的に受入れが難しくなった場合などについては、本学危機管理委員会の判断を待って、延期ないしは研修先の一部変更などにより対応していくことを参加者には事前に通知した。

また、本学では、2011年度に「障がい学生高等教育支援研究所」を新設したことに象徴されるように、外国人だけでなく、障がい者との「共生」をめざした教育をも推進している。今回、海外フィールド・ワークに参加を希望した障がい学生がいたのだが、施設面でのバリアフリーはクリアできるとしても、ベトナム現地での介護対応が充分ではないと大学責任者が判断し、残念ながら参加希望に応えることができなかった。現地の旅行者には、今後の課題として、介護施設等との連携を深め、介護人財を確保できるようにお願いしてきた。

## おわりに

地域社会におけるグローバリゼーションである「内なる国際化」にも積極的に対応、活躍できるグローバル人材育成に向けて、広島ベトナム協会が主催する「テト（旧正月）を祝う会」で「ベトナム平和学修」の報告をお願いした。祝会には、毎年、広島在住のベトナム人留学生やベトナム人就労者とその家族の方々が参加しており、彼らとの出会いを通して「内なる国際化」の現状と課題を認識し、今後もタンロン大学生や在広ベトナム人留学生との連携を深めてもらいたいと願っている。参加学生の中には、ベトナムを卒業論文のテーマ領域として設定した者もあり、ベトナムの女性労働、ジェンダー・セクシャリティ問題に関連した研究対象としてのベトナムと、今後も深くかかわっていくことと期待できる。今回の海外フィールド・ワークについての評価は、短期的なものだけではなく、長期的に視野で検証し続けていくことが必要であろう。学生自身の手になる『ベトナム平和学修報告書』（広島女学院大学国際教養学科平和学メジャー）を読了され、参加者の成長ぶりに気づいていただければ幸いである。同報告書で紹介されている方々、現地での通訳・ガイドの方々などのご理解とご協力により、今回の海外フィールド・ワークを遂行することができたことを感謝する。

(付記) 本研究の一部は、広島女学院大学学術研究助成によるものである。

## 【注】

- 1) 「平和学フィールド・ワーク」以外に、国際教養学科で実施した海外フィールド・ワークは以下の通りである。

「Global Village and Field Experience (カンボジア)」、 「アメリカ・ビジネス研修 (米・シカゴ)」、 「環境フィールド・ワーク (インドネシア)」、 「芸術文化フィールド・ワーク (フランス・イタリア)」、 「アジア・アフリカフィールド・ワーク (インド)」は10日間～2週間の短期プログラムであり、「海外英語研修 (イギリス)」、 「海外英語教育インターンシップ (イギリス・オーストラリア)」は、約1カ月間の長期プログラムである。

- 2) 篠原 収「グローバル人財・グローバル人財育成に向けた教養教育」 pp.7～9 参照  
3) 篠原 収「グローバル人財・グローバル人財育成に向けた教養教育」 pp.10～11 引用  
4) “Women of Vietnam Review” 2012 No.3 p.8 & p.14 参照  
5) “Women of Vietnam Review” 2013 No.3 p.2 事務所長紹介記事 参照

## 【参考文献】

- (1) 木村 汎, グエン・ズイ・ズン, 吉田元夫編『日本・ベトナム関係を学ぶ人のために』世界思想社 2000年  
(2) 篠原 収「グローバル人財・グローバル人財育成に向けた教養教育」『広島女学院大学生活科学部紀要』第20号 2013年3月  
(3) 篠原 収編『ベトナム平和学修報告書』(広島女学院大学国際教養学科平和学メジャー) 2015年2月19日  
(4) “Women of Vietnam Review” Vietnam Women Union 2012 No.3  
(5) “Women of Vietnam Review” Vietnam Women Union 2012 No.4  
(6) “Women of Vietnam Review” Vietnam Women Union 2013 No.3  
(7) “Overview of Aid Effectiveness Efforts in Gender Cooperation in Vietnam” UN Women 2012  
(8) “Vietnam Country Gender Assessment” The World Bank 2012  
(9) “Making a Difference” The United Nations in Viet Nam 2011  
(10) “Gender Equality in Elected Office in Asia Pacific: Six Actions to Expand Women’s Empowerment” UNDP 2012  
(11) “Gender-Based Violence Issue Paper” The United Nations in Viet Nam 2010  
(12) “Estimating The Costs of Domestic Violence against Women in Viet Nam” The United Nations in Viet Nam 2012  
(13) Vietnam News Agency “For The Victims of Agent Orange” VNA Publishing House 2007  
(14) “Cuchi 1960-1975 No.1 & 2 (地下トンネル史跡区の資料アルバム)” 2002  
(15) Dang Nghiem Van - Chu Thai Son - Luu Hung “Ethnic Minorities in Vietnam” The Gioi Publishers 2010  
(16) “Vietnamese Women’s Museum Catalogue” Vietnamese Women’s Museum 2008  
(17) Dang Thuy Tram “Last Night I Dreamed of Peace (An Extraordinary Diary of Courage from Vietnam War)” RIDER 2008

